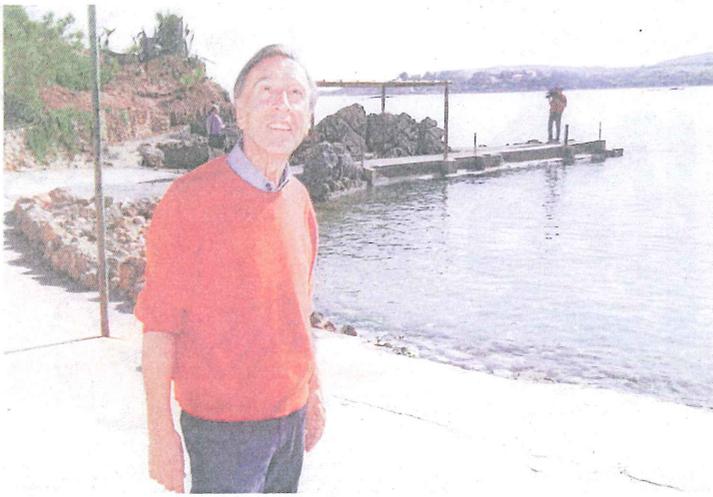


## 音楽への純粹な愛と喜び

指揮者  
井上道義

別荘があったイタリア・サルデーニャでくつろぐクラウディオ・アバド氏。この島の自然をこよなく愛したという。2003年4月

マエストロ、アバドの追悼文…何ともやるせない。

世界中のトップオーケストラの音楽監督や首席指揮者を務めたアバド。ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団…。それだけでなく多くの新しい団体、ヨーロッパ中の生え抜きの若者を集めたグスタフ・マーラー・ユーゲンツント・オーケストラを創設した。彼らが成人していくとマーラー・チェンバール・オーケストラと、時代を遡るようにな小さなアンサンブル形態へも移った。彼の素晴らしさは今考えると、そのような開拓魂にあったようだが、若い頃の僕にはそのことがちっとも分からなかった。

僕が24歳ごろにスカラ座主催の指揮者コンクールで優勝して、スカラ座やコンサートに始まった時期、多くの道を作ってくれた恩人だ。写真はリゲティの「アトモスフェール」を振ったと

き、本番でクライマックスがズレたことを「あれは君の棒が何拍子でなければいけないところ、これこれこうなっただからそうなったのだ」と楽屋で楽譜も見ないで指摘され、「こりゃ恐ろしい。すべてお見通しで！」とうめいた頃のスナップ。最近では英国出身の指揮者、ダニエル・ハーディングなど



本番からクラウディオ・アバド氏(右)と、指導を受ける井上道義さん(1971年)

いのうえ・みちよし 指揮者。昭和21年、東京生まれ。1971年、ミラノ・スカラ座主催グイド・カントレル指揮者コンクールで優勝。新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督、京都市交響楽団の音楽監督・常任指揮者を歴任。現在、オーケストラ・アンサンブル金沢の音楽監督。今年4月には、大阪フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者に就任する予定。

も、彼にたくさん背中を押ししてもらっている。

野心がこれっぽっちもなく、指揮者とオーケストラとの関係を近代的なものにしよとした。ときには必要な形としての主従関係さえも取り払おうとしているようにも感じられた。しかし僕は齋藤秀雄、チェリビタッケなどの弟子と自認しているから、彼の抽象的すぎる音楽語法、文学的なやり取りの少ない練習法に違和感があった。

特に何を言いたいか分からないベートヴェン、モーツァルト、ブラームスなどの演奏の後、生気にも面と向かって「せっかくながらベルリン・フィル振っているのに、なぜ自分のやりたいことを付け加えないのですか」と言ったりしたものだった。そうして僕は、自

分から離れてしまった…。

エリート音楽一家の家柄、大家であった叔父の研究成果の実践、音楽院の学長のお兄さんや指揮者の息子などのことをひっくりめ、その豊かさを斜め目線で見られなかった自分は、今考えると情けない。指揮者の中であんなに素直で裏がない人はいなかったのに。

がんで手術の後すっかりやせても、スイスやイタリア、そしてベネズエラまで行って後進のために身をささげていたのが、痛々しくて…。さらに遠ざけてしまった。

日本語では巨匠と訳し、畏怖し憧れるカリスマとしての「マエストロ」という存在。彼はそんな形だけの偉さではなく、音楽ができる喜びと人との間の愛を尊び、サルデーニャの自然を愛した。まるで彼が傾倒したイタリアオペラの大家ヴェルディと同様に。人生の王道ではないか。(寄稿)

◇  
イタリアの世界的指揮者で、2003年に第15回高松宮殿下記念世界文化賞(音楽部門)を受賞したクラウディオ・アバド氏は20日、死去。享年80。